
異世界バーサス

ひのき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界バーサス

【Nコード】

N8136V

【作者名】

ひのき

【あらすじ】

きりさき しんや霧崎真也の所属する超能力者で構成された組織はついに異世界に行く事に成功する。
が、しかし行った異世界の王国は反国王派の貴族に謀反を起こされそうになっていた！

組織はそれを逆手に取り動き出す……！！

第一話 いざ、異世界へ（前書き）

ご都合主義を恐らく含むと思うので見るに耐えないかもしれません。
嫌でしたらその時はページを閉じてください。

第一話 いざ、異世界へ

とある組織の本部の地下に巨大な実験室がある。今、そこでは白衣を着た男達が慌ただしく往来をくりかえす中、出入り口に黒い最新型の戦闘服に身を包んだ俺達は立っていた。

「さっ、準備はできたかな？」

俺、霧崎真也きりさき しんやといつも一緒に仕事をしているの鬼島妖一きじま よういち、雨宮直葉あまみや すくはの前に両手を腰に当てピンクの髪をツインテールに束ね眼鏡を掛けた少女が陽気に話しかけてきた。

「「「問題ないです」」」

俺達は渡されたリュックの中身を確認してチャックを閉める。

「じゃあ、最終確認をするよ。もう知ってると思うけど君達がこれから行くのはぶっちゃけ『異世界』だからね。当然、言語もちがうけどちゃんと喋れるようになったかな？」

そう、これから俺達が行くのは異世界なのだ。偶然にも組織の研究部門が異世界への扉を開くことに成功し異世界の資源と技術を手に入れようという上層部の意向でかなりのメンバーが異世界に行くことになった。

そして前を歩きながら「まさか、発見したアトランティスの遺跡にあった文字を解読、応用したら異世界への『門』が開くとは」と自慢げに語る少女が研究部門責任者であり組織の最高幹部の一人、暗号名プロフェッサーだ。ちなみに五人いる最高幹部5人の本名は

誰も知らないらしい。

「? ? ? ? ?
? ? ? ? ?」

俺は異世界側の言語で「こんにちわ」と言ってみる。

なんで俺が喋れるのかというとまず組織は『異世界』の現地人を誘拐しそいつの脳から情報を抽出した。その逆もまた可能で情報を別の脳に打ち込むこともできる。

そのおかげで俺達はあっち側の言語を話せるようになったわけだ。

「おお、ちゃんと話せるみたいだねー。よかったよかった」

ちなみに俺の能力は『肉体強化』、一時的だが身体能力を100%出し切ることでできる能力。暗号名はヴァンキッシュ。得物は腰に吊るした特殊な剣だ。

仕事仲間の妖一は『空間操作』で自らの作り出した異次元空間に物を入れたり出したり出来る能力（ようするに某ネコ型ロボットのポケットだと思ってくれ）で暗号名はマジシャン、アニメオタクだ。

そして、かなりレベルの高い美少女の直葉はシンプルだが火を操る『発火現象』、暗号名ウィッチだ。

俺達の強さはまあ、平均して武装した兵士100人くらいだろうか。

「君達が行くのはヨーロッパ風の剣と魔法があるどこの小説だこのヤローって感じの世界のカナディン王国って国だよ。まあ、すでに何人かメンバーがもうその国の王都に潜伏してるから彼らに聞いてね」

事前に渡された資料によるとカナディン王国とやらの王様は徳が高くとても豊かな国らしい。

「君達の任務は情報収集とできるなら良い方向に目立って、その王族に恩を売ることだよ。難しいけど頑張ってね。あと君達はそんなことしない筈だけど理由なくむやみに異世界人を殺さないように」

プロフェッサーが人差し指を立てて説明していると白衣の男がこっちに近付いてきた。

「プロフェッサー、〃 転移〃 の準備が終わりました」

「うん、分かったよ」

白衣を着た男が簡潔に報告を終えるとプロフェッサーと呼ばれた少女は人懐っこい笑みを浮かべて返事をした。

「準備できたみたいだから行くぞ」

プロフェッサーが歩き出し俺達もそれに付いて行く。

実験室の中央まで行くと色々な機械が置かれ台の上から十センチ浮いた空中にブラックホール？っぽい円の形の真っ黒な渦が出来ていた。

「さあ！あの渦を抜けるともうそこは異世界だよ！いつてらっしや〜い」

プロフェッサーが両手を挙げて興奮気味に語りかけてくるが……

「いつてらしやくいつて、プロフェッサーは来ないんですか？」

直葉が俺の思っていたことを代弁した。

「ああ、ボクはまだこっち側でやる事があるから行けないんだ」

これには俺も多いに賛成する。最高幹部は独力で本気の米軍を相手に出来ると言われていたりする。そんな人間兵器に隣を歩かれたら敵わない。

正直、今も背中に冷や汗が流れているし妖一なんて青い顔をして俯いている。いろんな意味で鈍感な直葉が羨ましい。

「先行しているメンバーの潜伏先も君達のリュックに地図が入ってるからね」

プロフェッサーが渦の前で「はっ」と立ち止まる。

「——転移先は細かく設定できないんだ。でも王都周辺に転移するから大丈夫だよ」

プロフェッサーは脇に退いて俺達に先を促し俺達は渦に足を踏み入れる。

「んじゃ、頑張つてね」

気の抜ける声援を背中に俺達は渦の中を突き進んだ。彼らが異世界に向かい、渦が消えると同時にプロフェッサーはある事を思い出した。

「あつ、先行メンバーにボクと同じ最高幹部のディザスターが居るって言うの忘れちゃった〜！」

プロフェサーはしばらく考え込んだ後、いつもの陽気な声で言った。

「まっ、いつか〜」

渦に入ると中は真っ暗だが前方から光が出ている。多分、そこに向かえばいいんだろう。

「ヤバい、ほんとにヤバかった。存在感だけで殺されそうだった」

そして、今日の妖一の第一声がこれである。

「？、何がやばかったの？」

渦の中を進みながら茶髪の髪を肩あたりで切って童顔の直葉が可愛らしく首を傾げる。

「鈍感なおまえがこんなに羨ましいと思ったことは無かったよ」

直葉が俺の言葉を聞くとバツと振り返る

「私が鈍感？、それは真也の方でしょ！」

「俺がそんな鈍感な訳ないだろ」

「だってそうじゃない！」

「違う！」

「違うない！」

そこで復活した妖一が起き上がってツツコミを入れる。

「夫婦喧嘩はよせ。それに最初はプロフェサーの気配の話だったぞ、なんでラノベの主人公の必須能力になってるんだ」

「 「誰が夫婦だ！！！」 」

俺達はそういい合いながらも渦の中を進んだ。

「そう言えば王族に恩を売って言うてたけど王族って誰なんだ？」

「カナディン王国の現国王はルーク・ジェアリード・カナディン。
そして妻、王妃であるセノア・フェルト・カナディン、その間の子の
第一王女のシルファ・レレーナ・カナディンに続き何人かの子息
——だつてさ」

後ろにいる妖一の今更の問いに俺が振り向いて答えてやる。俺も渡された資料を丸読みしたただけだ。それに資料には顔写真が貼っ

でありこの王女は銀髪銀眼のかなり美しく可憐な少女だった。

「つーか、この資料ペラッペラなんだけど。何これ？」

資料には俺達の行く異世界とカナディン王国の簡単な説明についてしか記されていない。

「先行メンバーが居るっていつでもそいつらも極最近に行っただけだから情報不足らしいぞ」

「何だ、まだ何にも分かってないのかよ」

俺がため息を吐いていると直葉が前を指差した

「あつ、もう出口みたいだよ」

確かに前を見ると出口のような場所が目の前まで迫り光が溢れ出ている。

「異世界なんだから何が起こるか分からない。各自、臨戦態勢で行くぞ」

俺が腰の剣の柄を掴むのを合図に俺達は一斉に光へと飛び込んだ。

飛び込むとすぐに足が地面を踏みしめた。どうやら、俺は草の上に立っているらしく空気が澄んで木の匂いがするから森かな？そこま

で考えたところで向こうから複数の男の声と金属のぶつかり合う音が聞こえてきた。

後ろにも二人の気配を感じる。

「 「はっ?」 「」

俺達が着地した場所は森だった。

そして少し離れたところでマントを身に着けフードを被った身長の低い一人と二人の男と女の騎士のような甲冑を着けた人物を19人くらいのいかにも盗賊といった体の男達が襲っているところだった。

第二話 王女を助けました

「 「はっ?」 「」

俺達は同時に驚いたが硬直が解けるのも同じですぐに俺達は森の木の陰に隠れた。

「いや」フアンタジーだ、本当にな」

妖一が自分の作り出した異次元空間から取り出した双眼鏡を覗く。

地球では銃が主流、中には俺の様にギミックのある剣を使う奴もいるが少数派だ。なのに向こうで行われている戦闘は全員が剣で闘っている。

「あつ、フード取れた」

今、フードを被った一人に向かって盗賊の一人が突っ込んでいった。フードは避けてそれを守るように闘っている男の騎士が盗賊を斬り伏せたがその時にフードが頭から外れたのだ。

すぐにフードを被りなおしたがフードを被っていたのは銀髪銀眼の少女だった。でも、なんだろう? 異世界人にはまだ誰にも会っていないのにあの少女には見覚えがある。……………ああ、そういう事か。

俺は二人に話しかける。

「あれ、誰か分かったよな?」

「フード被つてた娘ってカナディン王国のシルファ王女でしょ」

「ああ、俺も確かに見たぜ」

「確か、任務に王族に恩を売ってあつたが此処で助けてやったら成功じゃね？」

シルファ王女を守る騎士達の周りに10人くらいかの盗賊の死体が転がってはいるが騎士二人は、ちよつと疲れてきた、といった感じだ。でも、まだ生きているのは18人いるしなぜ、こんな城の外に一国の王女がいるのかは知らないが助けてやれば恩を売れるには違いないだろう。

「たかが18人なんだから一人で十分だろ？」

「俺、パス」

「めんどくさい」

なんでだ、なぜ、二人とも俺を見つめるんだ。

「…はあ、分かったよ俺が行ってくるさ」

俺は隠れていた林から出て今も尚、剣をぶつけ合う現場に足を向けると案の定、すぐに気付かれた。

「オイ、誰だ、てめえ？」

近くにいた盗賊の一人が何か喋ってくるが無視して腰の剣を抜き放

っ。

「まず、1人め」

ジウウツと肉の焼ける匂いがすると一人めの頭が体から離れ、思い出したかのように首から赤い噴水が吹き出る。

俺の得物のこいつは高速振動によって発生した熱を利用して物体を溶断するという武器だ。銘はシラヌイ（俺、命名）。

そのシラヌイも血に飢えているか高速振動特有のブウウンと音を立てている。

突然の部外者の攻撃によって仲間を殺された盗賊は俺に視線を移した。

「てえめら、何してやがる殺っちまえっ!!」

リーダーらしき人物（以後、リーダー）に命令された4人の盗賊が剣を振り上げて迫ってくる。

「遅い!」

俺が駆け出し三人の間近までせまると男達は驚愕した。そりやそうだ、まだ5メートルはあった間合いを俺の『肉体強化』の一つの自身の力を100パーセント出し切るく筋力強化で一瞬で詰めたのだから。

まずは1人めの頭上からシラヌイを振り下ろし真っ二つにした。

「うおおおお!!!」

2人めが突っ込んでくるが最小限の動きで横に回り、から空きの喉を切り裂く。

「ちっ！」

舌打ちしながら残りの2人は警戒して身を寄せ合って剣を構え防御姿勢をとっている。

接近すると片方の3人めは鎧迫り合いに持ち込もうとシラヌイの軌道上に剣を当ててきた。

「防御とか俺のシラヌイの前では無意味なんだがな…」

シラヌイの振動熱で何の抵抗感もなく剣が切断されそのまま3人めの腕を切り落とした。

「ほら、おまえの仲間だろ？ちゃんと手当てしてやれ」

そう言いながら俺は無い腕を見つめて絶叫している3人めの襟をつかんで4人めにぶつけ、3人め共々、胸をシラヌイで串刺しにした。

「これで、あと13人だな」

元人間の肉が地面に転がり濃い鉄の臭いが立ち込め始める。生き残りの13人は5人がシルファ王女を囲み、7人とリーダーが遠巻きに俺を警戒している。

俺は黙って足元にある死んだ盗賊の持っていた剣を蹴り飛ばす。

ズシュ
グサツ

剣が真っ直ぐリーダーの胸を貫通、さらに後ろにいたもう一人の腹に刺さって止まった。

——そのあまりにも現実離れた光景に俺以外の全員が凍りつき
 辺りが静寂に包まれる。

「た、たっ、助けてくれええええ！！！」

最初にそれを破ったのは盗賊だった。一人が俺の逆方向に逃げ出すと他の盗賊も後を追いかけていった。

「皆殺しはさすがにな……」

俺は残っているシルファ王女に向き直ると今度は騎士二人が剣を俺に向ける。

「貴様、何者だ！名を名乗れ！！」

女の騎士が怒鳴る。

「普通、人に名を尋ねる時は自分から名乗ってからじゃないのか？それともあなた様の国では、当たり前前の礼儀も教えないんですか、カナディン王国第一王女シルファ・レレーナ・カナディン様？」

俺が皮肉混じりに尋ねると3人が動揺するのが分かった。

「おまえ、誰にもの言っているか分かっているのか!？」

女の騎士が完全に事実を暴露した。横を見る、男の騎士さんが「言ってしまった」とか呟きながら手で顔を覆ってんじゃねえか。

「お止めなさい。ローラ、それにグレイも剣を収めるのです」

被っていたフードを払いながらシルファ王女が進み出る。

「ええ、私こそシルファ・レレーナ・カナディンです。ではあなた様の名をお聞かせ願えませんか？」

「――霧崎 真也だ。…いや、ここではシンヤ・キリサキだな」

「シンヤ・キリサキ様ですね。ではキリサキ様、先ほどは危ないところを助けていただき有り難う御座います」

シルファ王女が長い銀髪が地に着くほどの角度まで頭を下げる。

「別に礼なんかいりませんよ。それに顔をお上げください。逆に一国の王女がそんなにペコペコ頭下げてちゃダメだと思います」

ローラとかゆう女の騎士の拳が怒りで震えているがとりあえず無視する。

今は一番の疑問を聞こう。

「しかしなぜ、一国の王女様がこんな場所に従者二人だけでいるんですか？」

「実は一日程前から私は城にしながらこの場所から嫌な魔力とも違う『気配』の様なものを感じておりました。実はこれは二回目です、前は父上達に話したのですが誰も信じて貰えなかったのです。」

ですが数時間前、その『気配』が一層濃くなっているとしても居られずに……」

その『気配』とやらは十中八九、俺達がこの異世界に来るために使う渦のことだろう。前にもあったというのは先行したメンバーのもので説明がつく。

分らないのはなぜシルファ王女が一日前からそれを『気配』として知ることの出来るのかと言うことだ。

「で、来てみたらさっきの盗賊に襲われたわけですか……」

「はい、その通りです」

「分かりました、しかし王女様がこんなところに長居なされるのはさすがに行けないのでは？」

どうやら、`転移`自体は見られていないようだし最悪な場合は殺すことも考えたが杞憂に終わるだろう。

「あつ、勉強のお時間を抜け出して来たのでした！すみません、失礼します」

そう言つてそそくさとシルファ王女は後ろに騎士二人を連れて森の中を歩き始めたが途中でこっちに振り向いた。

「そう言えばキリサキ様はこれからどこに向かわれるのでしょうか？」

「王女様が何時もいらっしゃる王都に行こうと思っています」

「では一緒に行きませんか？」

一緒に行く理由も別に断る理由もないしな……。

「連れが二人居るのですが宜しいですか？」

「ええ、構いませんよ。人の多い方がにぎやかですし」

こうしてスパイとその国の王女が並んで歩くという世にも奇妙な展開になったのである。

第三話 城へ

「やはり、皆様は旅人なのですか？」

「いえ、知り合いが王都で暮らすと手紙で来たので、祝いに行くところでした」

その後、俺達はシルファ王女らと森を抜けてもう、王都の目の前の街道まで来ていた。先頭は男の騎士のグレイ・ノワールと女の騎士のローラ・マレアが（自己紹介済み）真ん中を俺とシルファ王女、後ろに直葉と妖一が歩いている。

「それでは、私も心よりご祝福申し上げます」

「有り難うございます。知り合いも喜ぶでしょう」

当たり前だが、知り合いとは先行メンバーの事だ。

「シルファ様、正門は一目に着くので、裏に参ります」

グレイ騎士が街道からそれ、俺達もついていく。数分、歩くと人気のない城壁の端にある小さな扉の前に着き、両脇には鎧を纏ったの警備兵のような2人組みが佇んで居た。

2人組みが敬礼する中、俺達は扉をくぐると壁の内側は人の賑わう商店街……等ではなく、よくある町の裏道で、これまた人気のない場所だった。

「でかい城だな……」

後ろの妖一の眩きを聞き、周りを見ると左の方に巨大な建造物が見えた。

「あれが、私の住むアーケスト城です」

シルファ王女が苦笑を浮かべながら話す。

「私はこれから城に戻るのですが、……やはりお礼をしたいのですが…宜しいでしょうか」

シルファ王女が上目遣いで尋ねてくる。止めてくれこんな事をされたら――

「もちろんです！王女様のお願いとあらば断れません！！」

――ほら、いつも二次元ばっかで本当は女子に免疫の無い妖一がこうなってしまうんだ。

「では、こちらです。付いて来てください」

まずこっち側に来たら先行メンバーの居るアジトに向かうはずだったんだが、今更断れないしな。成るようになるだろ。

目の前に出された紅茶を飲むと上品な味わいが口の中に広がった。

俺達はシルファ王女に城内に案内されこの客室に通された。ここま
で来るのに通った廊下は絨毯が敷かれ定間隔で高そうな調度品が置
かれて、如何にも、といった感じだった。
この客室もかなり広く暖炉があつて中心にテーブルが置かれ両側の
ふかふかのソファアの片方に俺と直葉が、反対側に妖一が座ってい
る。

「どうぞ、ごゆっくりと御くつろぎ下さいませ」

テーブルに紅茶のティーカップを置き終えた糸目のメイドさんが頭
を下げる。その時、メイドさんの手から紙切れと小さな物体が落ち
た。

「何か落ちましたよ」とは言わない、あからさまにワザトだったか
らだ。俺はそれを拾って紙切れを広げてみる。

□

私は先行メンバーの一人、暗号名ダイバーの深見沙耶ふかみ さやです。

こちら側に来ているディザスターからの命令によりその小物
は襟に着ける盗聴器です。

着けておいてください。

あなた達は恐らくこの国のルーク王に会うはずのできるだ
け情報の入手をお願いします。

ご武運を

——ちょっと待て。

え、何なの？あのメイドさん。まさかの組織の人だったの？俺は急いでメイドさんを探すがすでに客室を出た後だった。

それにディザスターって最高幹部の一人で組織最強の化け物だぞ。なんでこっち側に居るんだよ？

「どうしたの？変な汗かいて。気分でも悪いの？」

「止めてくれ、こっちまで気分が悪くなる」

直葉が心配そうに俺を見てきて、妖一がテーブルの茶菓子を摘みながら話しかけてくるので俺は震える手で紙切れを2人に見せると面白いほどに顔が蒼白になって行った。

ヤバイ、どうしよう、とか慌てていると客室のドアが唐突に開いた。

「国王陛下が参らるので準備をしておいてください」

それはさっきのメイドさんではなく警備兵だったが俺達は「は、は、いいい！」と悲鳴交じりに答えてしまった。

??? side

真也達、三人が城内の廊下を歩いている頃、城下町のある一軒家では、怪しげな人物達が話しをしていた。

「……射場さん、アーケスト城に潜入している深見さんから通信です」

「何?どんな内容だ?」

「……確定情報ではありませんが後続のメンバーが王女を助けたと言う事で城に入ってきたとのことですよ」

射場と呼ばれた長身の男は頭を掻きながら考えた。

「うーん、これは俺らだけで決められないな。ディザスターは何処に居る?」

「……今は、下の階にいます……」

「分かった。呼んでくる」

「……了解」

?
?
?
s
i
d
e

o
u
t

第三話 城へ（後書き）

誤字脱字、アドバイス受け付けてます

第四話 王様に会いました

盗聴器を服の襟に着けて待っているとコツコツと硬い靴が床を叩く音が聞こえてくる。

その足音は客室の前で止まり、先に白に金の刺繍が入った礼服にサ―ベルを腰に差した顔つきから四十代後半の厳つい奴と、後ろに王冠を被ってマントを羽織ったさっきの男と同年代の如何にも王様って感じの男性が入ってきた。

「ルーク・ジェアリード・カナディン陛下の御前だ。頭が高いぞ！」

厳つい方が「後ろの男性がルーク王だ、ひれ伏せ」と怒鳴ってくるが此処の礼儀は分からないのでマンガであつた左方膝を立てて左拳を心臓のある部分に持って行って頭を垂れてみる。

「顔をお上げください。旅の人」

今度は王冠を被ったルーク王が喋って来る。正直、頭、下げたり、上げさせたりと面倒くさいが仕方なく顔を上げるがこっちは平民の設定だ、直視はしない。

「娘を助けてもらい感謝します。お礼と言つては何なのですが、何かご所望の品は有りませんか？」

どうやら案外、国王と言つてもそこらの大人とあんまり変わらない言葉遣いの様だ。

「陛下、私共に礼等は無用で御座います。陛下自らがこの場所に足

を運んでくださった、これで、十分です」

あのメイドさんが落としていった紙切れの裏に実は『諸注意』と書いてある箇所があり三人揃って、「表に書けよ！」とツツコミがハモったのはご愛嬌。

そこにはルーク王は「これだっ」と思った人には自ら礼を述べに行くらしい。多分、金銭で手を打とうとするからあえて断って機嫌とつとけと書かれてあった。

「そうですか、本人達が断るのなら無理やり押し付けるのも無礼と言うもの、止めておきましょう」

ルーク王の眼は最初は、威厳もへつたくれも無かったが一瞬、品定めでもするかのようなそれに変わったが顔を見ていなかった真也達には分からなかった。

「陛下、時間が迫っております。お急ぎを」

サーベル男がルーク王を急かす。やっぱり王様っていうのは忙しいんだな。

「ああ、そうだな。それでは旅の人、御機嫌よう」

そう言っただけでルーク王とサーベル男は嵐の様に現われ去って行き客室には俺達しか居なくなった。

「さっさと此処から出ようぜ、落ち着かねえ」

妖一が腕組みしながら話しかけてくる。

「そうだな、アジトの方にも行かないと行けないしな」

俺と妖一が客室のドアのところまで歩いていくと「あ、待ってよ。お菓子が残ってるよ」と直葉がテーブルの上に残ってる茶菓子に手を伸ばしていた。

「…太るぞ」

呟くと直葉は茶菓子と俺達を何度も交互に見やった後、諦めたのか後ろめたい顔をしながらこっちに歩いてきた。

「責任とつてよね!」

「何の!?!?」

「ほら、バカやってないで、行くぞ」

「「バカじゃ（ないもん）ねえ!?!」」

「はぁー」

俺と直葉の当たり前の返答に妖一はため息を吐きながらドアを開けるのであった。

「陛下、なぜ、このような忙しいときにお足をお運びに成られたのですか？」

私の専属の近衛騎士であるカリアン・エスター・グルートが少し怒った顔で聞いてくる。

「王族としての勅、と言った処だ。それよりカリアン、我らの仲だ、そのような言葉遣いは止めてくれないか」

「……これで、良いか」

「ああ、それで良いぞ。で、彼らの動向はどうなってる？」

「糞將軍の野郎が一部の貴族とコソコソ、密会をしている以外は特になにも無いな」

「彼は反国王派の筆頭なだけに相応の影響力を持っているからな。問い詰めた所ではぐらかされるだろう……。南の竜の件もあるというつのに」

「気になんか病むな。おまえは十分に頑張ってるさ」

カリアンが私を励まそうと肩を叩く。

「それよりも、さっきの餓鬼供、どう思った？」

「個人的には何か隠していた気がしたが、それに自分で言うのもなんだが王族を助けたんだから謝礼をもぎ取ろうとするのが普通だ」

「おまえもそう思ったか。実はな、最近、城内に異様な気配を持った奴らが紛れ込んでる感じがするんだ。まあ感じだけで誰かは分からねえが」

「そうか、カリアンがそう思うのならそうなんだろうな…、一体、どうしたものか……」

ルーク王 s i d e o u t

この国は今、一部の貴族による謀反の危機に直面していた。

第四話 王様に会いました（後書き）

ルーク王の口調を変更しました。

第五話 アジト到着

「えーっと、アジトはこっちの方向だな」

俺がさっきまで妖一の異次元空間に入れてもらっていたリュックから取り出した地図を見る。

「それにしても人が多いな、こっちは」

「ああ、城の近くの方は人気が無かったしな」

城を出た後、地図をたよりに歩き回っていると噴水のある広場まで来た。

城付近はいかにも豪邸って感じの建物ばかりだったが此処は小ぢんまりした民家が多いから前者は貴族、後者は平民が住んでいるんだろう。

「いらっしやーい!!」

「ほら、その奥さん見てかないかい。ちゃっとだけだからさ」

「これが噂の幸運を呼ぶ壺つぼ、今ならたったの金貨3枚だよお!!」

周りには屋台や露店を開いた商人達が客の呼び込みをしている。最後の方のは聞き間違えでありたい。

金貨というのはこの世界の通貨の一つ他にも銅貨とか銀貨もあり整理するところなる。

銅貨＝10円

青銅貨＝100円

銀貨＝1000円

白銀貨＝1万円

金貨＝10万円

白金貨＝100万円

幻竜貨と言うのはその昔、ドラゴン種のなかでも最強を誇る幻龍の死体の鱗から作られたらしく今では一国の王ですら目にすることがほとんど無いとか。

「お、あつたあつた。ここがアジトだな」

広場から少し離れた所にアジトはあつた。見た目は完全に二階建ての民家だが地図ではここになっている。

「とりあえず、確かめてみようよ」

直葉がアジトの玄関のドアをノックしようとする直前にドアが開いた。

「組織の霧崎真也、鬼島妖一、雨宮直葉だな。入ってくれ」

顔を出したのは長身でオレンジの髪をした青年だった。青年はそれ

だけ言い放つとアジトの中に戻ってしまった。

「お邪魔しますかね」

妖一の言葉を皮切りに俺達はアジトにあがった。

中も普通の民家でリビング部分にはソファとか椅子、テーブル等が置かれていた。

「では、自己アピールでも始めようか」

椅子の一つに座る人影が口を開く。闇を凝縮した様な黒い手袋とダークスーツを着込み髪も目も黒い二十歳半ばの男だった。

「……う、…かはっ」

一瞬、目が合った、それだけで数百本の剣を背筋に突きつけられたような恐怖を感じ、胃液がこみ上げ膝をついてしまった。良く見ると妖一も同じ状態だった。

「おつとすまない。今、引っ込めよう」

途端、感じていたプレッシャーが消えた。ここまで強くないが覚える。——これは最高幹部の一人、プロフェッサーと同じだ。

「さっしが付いた様だな、俺が最高幹部のディザスターだ」

「……遠見志乃（とみし）です。宜しく願います」

こっちは長めの黒髪にメガネを搔けた文学少女の雰囲気を持った女

性だ。

「同じく射場^{いは}弓人^{ゆみひと}だ」

直葉が名を名乗り俺と妖一も立ち直ってそれに習った。

「暗号名は名乗らないんですか？」

直葉が小首を傾げる。

ちなみにヴァンキッシュ、マジシャン、ウィッチは順番に俺、妖一、直葉の組織での暗号名だ。普通は、作戦実行中は暗号名を使うのに彼らは本名しか名乗らなかった。

「…プロフェサーから聞いていないのですか？」

「詳しい事は先行メンバーから聞けと…」

返答するとディザスターが「プロフェサーの奴め」と舌打ちした。

「此处では、はっきり言って名前が晒されても危険はないからな。異世界人との係わり合いも本名のがやり易いんだ」

「……謎は解けましたか？……それでは私が異世界の状況を説明しましょう」

深見さんがメガネをくいつと持ち上げる。

深見さんの話をかいつまむところなる。

この世界は魔法があり、人間の他にも猫耳やら兎耳の生えた亜人族が存在し（妖一が飛び上がって喜んだ）魔物と呼ばれる普通の動物とは比べ物にならない生物も確認され、それらを討伐するために作られた冒険者ギルド。

そして、このカナデイン王国はレストリアと言う大陸の東にありその西には大国の軍事国家、ノーラス帝国、東には日本の様に自衛のための武力しか持たないユクア教国、北のルベルク皇国があり、南は魔物の棲む深い森があるらしい。

「任務についてはオレが説明しよう」

ディザスターが先を紡ぐ。

「この国の先王はかなりの貴族びいきだったそうだが現国王のルーク・ジェアリード・カナデインに代わってからは平民にも気を遣っていた。無論、貴族からは反感を買う。その筆頭、反国王派のアルフォード・гент・セルニア将軍が一週間後、謀反を起こす事までは解かっている。我々の任務はその時に王族を保護しアルフォード将軍を返り討ちにする事だ」

「それにどのようなメリットが…？」

俺が疑問を投げかける。プレッシャーが消えたことで話しやすい。

「我々なら文明の遅れているこの世界の一国程度なら、滅ぼす事はできるが、その後にここにしかない技術（魔法）や資源を効率よく

入手することまではできない。…つまりオレ達、最高幹部の考えは、この国と友好な関係を結び効率よく事を進めることにある」

そう言いながらディザスターは椅子の背もたれに寄りかかった。

第五話 アジト到着（後書き）

悩んだ末に暗号名は使わないでおくことにしました。

誤字、脱字、アドバイス受付中です

第六話 出撃

「青銅貨5枚になります」

「…はい、どうぞ」

俺が異世界に来てから一週間がたったのだが、特にする事もないので城下町をブラブラしている。

なぜ、金を持っているかと言うと裏路地で不良に絡まれたので、優しく腕の骨を折ってやると逆に泣きながら財布を差し出してきたので、ありがたく頂戴してやった。

「そついや、おまえさん知ってるかい？あの噂」

店のおばちゃんを買ったホットドックを俺に渡す。

「何をですか？」

最近、仲良くなった食い物を売っている店のおばちゃん是一般人が知らないような色々な情報を無駄に知っている。

「大きい声じゃ言えないんだけどさ、あの反国王派筆頭のアルフォード將軍が今日か明日の夜に謀反を起こすって話さ」

「そ、そつなんですか。本当だったら大変ですね」

この事はすでに確定情報だ。俺が異世界に来る前からアルフォード將軍の下に反国王派の貴族や傭兵が集い始めていたらしい。もっとも、多すぎるとバレルから少人数らしいが。

「そうだろうねえ、もし成功しちまったら大変なことになるよ…。
そうだ！ いっちょ、あんた、私と掛けてみないかい？」

「その賭け、多分、どっちもハズれますよ」

俺は即答した。

「おや、どうしてそう思うんだい？」

なぜなら、俺達、組織が介入するからだ。

「それは後のお楽しみと言うことで、それでは失礼します」

俺はホットドッグを食いながら歩き出す。今は昼2時くらい、動き出すのは夜だからまだ時間がある。

さて、今日は行ってなかった南に行ってみよう。

南に向かって歩いていると幾つめかの曲がり角で誰かにぶつかった。

「きゃっ！」

「おっと」

慌ててそのぶつかった誰かを支えてやると頭から突き出た二つの犬耳が目に残った。

「大丈夫かい？」

「えっ、………… あっ、はい大丈夫です…」

身長は俺の頭二つ分くらい下で細い体だが胸には小さな双丘が、頭の犬耳からぶつかった誰かが、亜人族の少女だというのを証明している。

「待てや。こらあああ！！」

少女が来た方向から鞭を持った男が走ってくるので何となく少女を見る。すると、さつ、と俺の後ろに隠れた。やっぱりあの男が少女を追っていると見て間違いないだろうな。

この世界には奴隷制度が健在している。

男の持つ鞭と少女のみすばらしい衣服から見て少女も奴隷なんだろうが、正規の奴隷には服従の魔法が掛けられた首輪が着けられているが少女にはそれが無い。

恐らくは盗賊が、どこかの村を襲った時に捕れられ、奴隷商人に売りに出されたつてとこだろう。

「はあ、あんた、……そいつを、さつさと、俺に返しなつ。そうすりゃあ、…痛いめには、合わねえぜ！」

男が俺の目の前まで来て脅してくるが、息を切らせて膝に手を付いているので全く、恐くない。

「うーん……」

はっきり言って俺には関係ないから少女を差し出して終わりにしたい。でもそれも寝覚めが悪くなると思う。

「俺に返しなつてこの娘、首輪を着けてないぞ」

「う、うるせえ！そんなの如何だつて良いんだよ！！」

男は風切り音を立たせながら鞭を地面に叩きつけるとパシンツと高い音がした。

「ひゃんツ！」

少女が俺の服を掴みながら悲鳴を上げる。

「見ろ、怖がつてるじゃないか」

「あああ、クソ！つべこべ言わずに渡しやがれつてんだ！！」

キレたのか男は鞭を俺に打ってくる。

それを右手に食べかけのホットドックを持っているから空いている左手で器用に受け止めて力を入れて引つ張ると簡単に男の手から鞭が抜けた。

喧騒が聞こえたのか、周りを見るといつの間にか集まった野次馬が遠巻きに見つめていた。もう、ここまで来ると引けないし利用させてもらおう。

「あんた、一人の女の子相手に此処までするか普通？周りの皆さんもそう思うでしょ？」

野次馬に問いかけるといくらか蔑むような視線が男に集まる。中には「ロリコン？」とかヒソヒソ話している人までいた。

男の顔色を伺うと俺に対する恨みやら後悔やらの感情が混じった複雑な顔をしていた。

「ま、あんたもこれで飯を食ってるんだから文句は言わないよ。ほら、そんなにこの娘が欲しいのなら、どうぞ」

背に隠れている少女の手を握って前に出してやる。少女は最初、上目遣いで抗議してきたが「大丈夫だから」と言ってやると大人しくなった。

「あそこで手を出したら人間じゃないよねー」

「奴隷じゃないんだろ、あの娘…」

野次馬一同から非難の声が上がって男はかなり居心地が悪そうになつていくが目は俺を睨んだままだ。

「この娘は首輪着けてないんだから奴隷でもない、あんたが追いかける理由はないはずだ」

潮時だ。長引かせると野次馬達が勝手に暴走を始める。任務で戦場に行った時もこんな光景を何度も観たから分かる。

「おい、そこで何をやっている!!」

ちょうど良い処に、遠くから鎧にハルバートを身に着けた兵士の2人組みがこっちに向かって来た。

「あ、やべ衛兵だ!」

野次馬が蜘蛛の子を散らす様に逃げていく。男も「覚えてろっ」と負け犬の遠吠えを放って去っていった。

それを見ていると服を引っ張られるので目を移すと少女が赤色の瞳で俺を見ていた。

「あの、その…、あ、ありがとうございました」

「別に良いよ、そんなの。人として当たり前さ」

頭を撫でてやると少女は嬉しそうに瞳を閉じた。

今回は少女が正規の奴隷じゃないからこそその話だった。もし逆だったら男の言い分に誰も口出しできないし正規ではなかったからこそ俺の方に正義があり野次馬も味方した。

「俺はこれから仕事があるから、あの衛兵の人に面倒見て貰ってくれないかな？」

「はい、助けてもらった人にそこまでできませんし…」

「そうか、なら良かった。」

俺は少女と手を繋いで衛兵の所まで歩いていき事の顛末を説明した。

「すみませんが、詳しい事情聴取のために宜しければご同行願えませんか？」

衛兵の一人が少女に怪我がないか確かめながら聞いてくる。

「すみません、どうしても外せない用事があるので…」

少女は不当に奴隷にされるとこだったんだ。無毛には扱わないだろうから俺がいなくても如何と言うことはない。

俺はもう一度、少女に別れの挨拶をして少し強引にその場を後にした。

「——さてと」

途中で食い終わっていたホットドッグの包み紙を捨てて空を見上げると、太陽のやつも傾いてきていた。もう、アジトに帰らなければならぬ。

あ、結局、城下町の南には行けなかったじゃん。

「準備はできたか？」

ディザスターの確認に問題なしと答える。

時間は深夜、さっき城に潜入しているメンバーからアルフォード將軍が動き出したと連絡があり俺達は出撃の準備をしていた。

俺達の共通装備品は、

——最新型の黒を基調とした戦闘服。

これは、一定以上の衝撃が加わるとその部分が一瞬だけ鉄より硬くなる優れたものだ。

——片目と方耳に装着する赤外線暗視ゴーグルと小型通信機。

共通装備品はこれくらいで後は各自、自分の得物を持っている。

俺は振動熱で物を溶断するシラヌイ。

妖一は異次元空間から取り出したアメリカ海兵隊のが使用しているアサルトライフルのM16A4。

直葉は……、こっちは完全に手ぶらだ。

弓人さんは愛用していると言うアンチマテリアルライフルのバレットM82A1。

志乃さんはアジトでオペレーターを務める。

ディザスターはカトラスと言う昔の海賊が好んで使っていた湾曲した刃を持つ剣。

俺達は無言でアジトを出るとアーケスト城が夜の満天の星空を汚すかのように火の手が上がっているのが目に入った。気付いた人々も家から出て城の方向を見上げている。

「伝えたとおり既に国王と王妃はアルフォード將軍の手に落ちている可能性が高い。弓人は遠方から敵兵を狙撃。霧崎、鬼島、雨宮は王族を保護。俺は首謀者の將軍を片付ける」

俺達が頷くの見てデイズターは作戦開始の宣言をした。

「さあ、ショータイムの始まりだ」

第七話 救出劇 1

アーケスト城は王城で当たり前のように敷地が広い。

城の庭園は訪れる者を優しく出迎えるが、戦時となれば一個連隊を収容できる程だ。今も例の漏れず幾つかの分隊（7〜12人程度）が指示を受けていた。

もつともそれらは全て反国王派の人間だったが。

「全員、帯をつけ終わったか！？味方に殺されても文句言えねえぞ！！」

反国王派のの兵士と話に乗った傭兵達は同士討ちを避けるために緑の太い帯を腰に巻いている。

「これで手柄取れたら俺らも騎士になれんだ！！気張って行け！！」

と、城下町でゴロツキを束ねる不良男は言いたかったのだろうが、「れ」と「で」の間くらいで突然、頭が破裂して、自身が死んだことに気付かぬまま人生の幕を閉じた。頭の無い死体が倒れ付すのと同時に轟音が轟く。

「……！！」

正確に言えば、1km程度はなれた高台から弾丸を音速を超えるスピードで撃ち出すバレットM82A1で弓人が狙撃し銃声が遅れて聞こえただけが、銃そのものを知らない異世界の人間には頭が破裂した様にしか見えないだろう。

近くに居た者に肉片が盛大に降りかかるが驚愕のせいで呆けたままであった。

——再度の轟音。

いつの間にか近くにいた仲間の体が真つ二つになっている。

「ひつ、ひいいい！！！」

ようやく事態に気付いた反国兵士が逃げようとするが城の門は自分達の手で外部の人間が入ってこれないよう閉じてあった。

——次々と血を噴出しながら屍の小山が出来上がっていく。

狙撃は、目標が移動していると難易度が格段に上がるが弓人の能力である『目標追尾』で名の通り弾丸が目標（敵）を追尾、軌道を変えて的確に命中させていく。

気付けば庭園には、誰もいなくなり鮮血を浴びた草花と肉の塊だけが存在を許されていた。

『庭園内の目標を全て撃破。敵兵は確認出来ず』

弓人が耳に着けている通信機に声を発すると数秒後、城の巨大な門の一部が爆音と共に破壊された。

『了解。これより作戦を第二段階へと移行』

城内に新しく入ってきたのは4人、内の1人は女だった。

「……第1王子レオン・ハルト、カナディン、第2王女フィーナ・アリス・カナディンはすでに保護が完了。残る保護対象は国王と王妃、第1王女です。国王と王妃は反国王勢に城内3階の王族専用の寝室にて捕縛されているのを発見。第1王女については現在確認できていません。將軍は陣を敷く1階、謁見の間にかんりの兵士と共に確認しました。」

アジトでオペレーターをしている志乃からの通信。

城内に潜入していたメンバーが監視カメラをいたる所に取り付けておいたので敵の大まかな分布は判明している。

「なら作戦に変更は不要だ。オレは將軍を片付けに、貴様らは国王らを保護しろ」

「了解」

肌の露出を極限にまで避け、全身を黒で纏ったリーダー格の青年と他の3人は一定の距離を保ちながら靴が血で濡れるのも構わず庭園を突っ切り城内へと侵入した。

彼らが城に来る少し前

「耳をお塞ぎ下さい、レオン様、フィーナ様」

僕とフィーナはサヤに言われたとおり急いで耳を塞ぐ。

掌越しでも分かるような大きな音がして、襲い掛かってきた兵士が血を流して倒れた。

さつき外から喧騒が聞こえて妹と共に目を覚まし、寢室から出て歩いていると兵士の皆が城の中だと言つのに剣を手にこっちに走ってきていた。

慌てて引き返そうと踵を返すと誰かにぶつかった。

「レオン様にフィーナ様ですね？こちらに来てください」

最近入ったばかりなのに仕事をすぐに覚えて、完璧にこなすし愛想が良いからと僕たちの世話をしているメイドのサヤだった。

サヤは見慣れない黒い物を持ちながら混乱している僕たちを引っぱって行つた。

「サヤ、皆何してるの？お祭り？」

今年8歳になったばかりのフィーナがサヤに問いかける。

「ええ、そんな所ですよフィーナ様、私達はあの者らと鬼ごっこをしているのです」

「わーい、鬼ごっこ大好きい」

違う、僕には分かる。

あの兵士達は僕たちを捕まえに、もしくは殺しに来たんだ。今はサヤの持っている見慣れない武器でどうにかなっているけど数で攻められたら終わってしまう。

僕は気付かないうちに腰の護身用の短剣を握りしめていた。

「優先順位第1位の4番、5番を発見しました。応援を頼みます」

サヤが耳につけていた細長い小物を触りながら独り言をつぶやくと小物からうまく聞き取れないけど声が聞こえた。

僕とフィーナが驚いていると廊下の向こうから鎧の金属音といつしよに6人の兵士が駆けてきていた。

サヤが黒い物を兵士に向けると小さな光と音がせんたんから出る。すると前列の4人の兵士の鎧に穴があいて何人かが斃れた。

残っているのは後ろに隠れていた2人の兵士だけ。いつまでもサヤに守られてじゃダメだ、そう思った。

今、思い返せば僕はすごく馬鹿な事をしたと思う。死線を何度もくぐりぬけた敵の間合いに単身で突っ込むなんて。

……相手の一人が敵じゃなくてほんとによかった。

右側の兵士が剣を構えて笑っていたけどその顔が唐突に苦痛に占領された。それもそのはず、その兵士の脇腹に左側の兵士の剣が柄の根元まで入り込んでたんだから。

刺された兵士が脇腹をおさえながら叫んでいたけど気にならなかった。

何で？ どうして？ 仲間割れ？ 裏切り？

疑問が僕の頭の中をグルグルとまわっていると刺した兵士が、いきなり首のあたりの皮をつまんだと思うとベリベリと顔の皮膚をむき始める。

「うつ、うわああ！！」

腰がぬけて尻餅をついてしまった。

皮膚のしたには、ふつつ肉がある。なのに目の前の兵士は悪魔なのか顔の下にもうひとつ顔があった。

「あら、影明様かげあきではありませんか」

サヤがフィーナの目を抑えながら悪魔にかたりかけてる。怖くないのだろうか。

「反国王勢の兵士の一人にすり替わっていたが、面倒になっておった処で通信で応援要請があったのでな。来てやった次第だ」

悪魔が力がぬけて、尻餅をついてる僕に手をのばして無理やり立たせた。

「当方の名は、忌瀬影明いみせかげあきと申す。君達を助けに来た沙耶殿の同胞だ」

「え、……、えっ」

言ってる意味がよく分からない。このイミセと言う人物はサヤの仲間で魔法かなにかで別人になってたけど僕たちを、たすけるためにやってきたって事だろうか。

「意味は解からんで良い。当方らのする事を全てが片付いた後、皆に語ればそれで良い」

「ん、どうなってるのー！？私にも教えてよーー！！」

フィーナがサヤに手で目隠しされながら抗議してるがサヤに首に手刀を打たれておとなしくなった。

僕はべつに気にしないけどメイドが王族に手をあげたんだ。大丈夫なんだろうか。

「城を出るのが先です。急ぎましょう」

「そうだな、その小娘を渡せ。当方が運ぼう」

僕と気絶したフィーナはイミセにズタ袋のように両肩に担がれた。

「ど、どこに行くんですか！？」

「安全な場所だ」

僕とフィーナを担いでるのに涼しい顔をしてるイミセはサヤを前衛にして走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8136v/>

異世界バーサス

2011年11月16日18時01分発行